



Title	日本語の「外の関係」を持つ名詞修飾節について
Author(s)	山下, 好孝
Citation	国際広報メディア・観光ジャーナル, 37, 87-97
Issue Date	2023-11-15
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/90785">http://hdl.handle.net/2115/90785</a>
Type	bulletin (article)
File Information	Jimcts_37 (5).pdf



[Instructions for use](#)

## 日本語の「外の関係」を持つ名詞修飾節について

モンクット王ラカバン工科大学教授、北海道大学名誉教授  
山下 好孝

### On Japanese Noun-Modifying Clauses Based on “External” Relations

YAMASHITA Yoshitaka

The present study examines Japanese noun-modifying clauses based on “external” relations. This term means that the head noun has no syntactic relation to the predicate of the modifying clause. Like “internal” noun-modifying clauses, this type of clause is used to provide additional information or describe characteristics of the noun.

Noun-modifying clauses based on external relations can be divided into three types:

1. Relations based on “schemas”.
2. Relations suggested by head nouns with relative meaning.
3. Relations of content and verbal action expressed by head nouns.

Finally, it is asserted that noun-modifying clauses in Japanese generally show close semantic relations to their main clauses.

abstract

## 1 はじめに

名詞修飾節が現れる興味深い文がある。

- 1) A国人は「人が嫌がること」をするが、B国人は「人が嫌がること」をする。

この文の下線部は名詞修飾節の被修飾名詞句、いわゆる「底（てい）」を示す。この文を理解するには異なる2つの解釈をする必要がある。

- 2) 人が億劫になり嫌がることを自分から率先して行う。  
3) 人がそれをされると嫌がることをしてしまう。

1)を理解するためには、これら2種類の意味解釈があり、それらがスキーマとして前提とされなければならない。スキーマとは、人間の過去の経験や外部の環境に関する構造化された知識の集合のことを言う。そして「～が、～」という逆接の接続詞が使われていることで、これらの2つの文はどちらか一方の解釈を受けることが分かる。どちらが肯定的な意味でどちらが否定的な意味かは、やはりスキーマに依存している。つまりA国人についての知識とB国人についての知識である。どちらの国の人にどちらの解釈が付与されるかは、スキーマが決定するのである。

統語的に分析すると、各名詞修飾節の底は節内の述語と格関係を結んでいる。

- 2') 他の人がそのことを嫌がるので、敢えて自分から進んで行う。  
3') 他の人がそのことを嫌がるので、意地悪でそうしてしまう。

つまり、名詞修飾節の「内の関係」にあると言える。

山下（2023）では「内の関係」にある名詞修飾節の文法適格性判断にもスキーマが関与する例を見た。

- 4) (出所) 煙突から煙が出ている。→ 煙が出ている煙突  
5) (出所) この学生が京都から来た。→ # この学生が来た京都  
(「二」の解釈)

(#の記号はこの文が文法的ではあるものの、意図した意味解釈を許さないことを示す。)

4)の例にある「煙突」は煙の出所にしかならない。従って「煙突」が底になる名詞修飾節で「カラ」格が基底にある内の関係を想定することが出来る。それに対し5)の「京都」は「出所」とも「行き先」とも取れる。これらの2

つの読みが存在するとき「行き先」の読みの方が優先される。つまり、述語動詞に「来る」が用いられると、「どこから来た」かよりも「どこに来たか」が情報の中心を担うのである。

本研究ノートでは、名詞修飾節の底が節内の述語と格関係を結ぶものを「内の関係」を結ぶと規定し、格関係が想定されないものを「外の関係」であると定義づける。「外の関係」の名詞修飾節にはスキーマの働きが重要であるが、すでに見たように「内の関係」に於いてもスキーマが機能する場合もある。

その上で、本稿は「外の関係」を下位分類し、それぞれに関する考察を進める。さらに名詞修飾節が、主節の表現と密接に関連付けられることも示す。

## 2 スキーマに基づく「外の関係」

以下の三つの複文の従属節中にある名詞句を底とする名詞修飾文を作ってみよう。

- 6) 彼はバスに乗って学校に来る。→ 彼が乗って学校に来るバス  
 7) 彼はバスでどかっと座席に座って学校に来る。→ 彼がどかっと座席に座って学校に来るバス  
 8) 彼は宝くじを爆買いして大金持ちになった。→ 彼が爆買いして大金持ちになった宝くじ

これらの名詞修飾文は、被修飾名詞と修飾節中の主動詞が格関係を直接には結んでいない。

- 6) 来る ≠ バス (に乗る)  
 7) 来る ≠ バス (で座る)  
 8) 大金持ちになる ≠ 宝くじ (を爆買いする)

これらは「内の関係」の名詞修飾節とはいづらい。むしろ、一連の行為の背景にあるスキーマの関係に基づく「外の関係」に分類した方がいいであろう。同様に以下の典型的な「外の関係」にある名詞修飾節も、それらの後に示した文がその根底にあると考えられる。

- 9) サンマを焼いている匂い (がする。)  
 ← いい匂いを周りに発散しながらサンマを焼いている。  
 10) 辞書を買ったお釣り (で消しゴムを買った。)  
 ← 辞書を買って、お釣りをもらった。  
 11) 銃を撃った跡 (が残っている。)  
 ← 銃を撃って、その銃弾の跡を残した。

これらの三つの例では、次のような論理関係に基づくスキーマが想定出来る。

- 9') サンマを焼く : 匂いが出る : 周りに匂いが広がる
- 10') 辞書を買う : 大きいお金で払う : 細かいお釣りをもらう
- 11') 銃を撃つ : 銃から出た銃弾が跡を残す : 銃弾の跡は後に残る

また、これらの名詞修飾節は独立文に分解して解釈が可能である。

- 9'') 誰かがサンマを焼いている。匂いがするから分かる。
- 10'') 辞書を買って大きな札で払った。お釣りが出た。
- 11'') 誰かが銃を撃った。銃弾は跡を壁に残した。

では、次のような例はどうだろうか。

- 12) ?? 消しゴムを買ったお釣りで辞書を買った。  
(??の記号はこの文がかなり不自然であることを示す。?はいくぶん不自然であることを、\*は文法的に不適格文であることを示す。)

我々の持つスキーマは次のようなものである。

- 12) 消しゴムの値段は100円前後だからお釣りは10円~40円くらいだ。  
辞書の値段は数千円する。だから消しゴムを買ったお釣りで辞書は普通買えない。

しかし、スキーマを覆す特別な情報を加えると、論理的に正しい文になる。

- 13) 50円の消しゴムを買うのに10000円札で支払った。お釣りの9950円の中から6000円の辞書を買った。  
→ 消しゴムを買ったお釣りで辞書を買った。

以上がスキーマ関係に基盤を置く典型的な「外の関係」にある名詞修飾節である。多くの場合、「外の関係」の名詞修飾節は被修飾名詞句の情報に関して内容を補充している。しかし「外の関係」の名詞修飾節でも、被修飾名詞の特定化をしている場合もある。

- 14) これが消しゴムを買ったお釣りで、これが辞書を買ったお釣りです。

以下の節では別のタイプの「外の関係」について考察する。もちろんこれから取り上げる「外の関係」の名詞修飾節もスキーマが関与している。

### 3 相対補充タイプの「外の関係」

次のような名詞修飾節は、英語などの外国語に直訳することが不可能である。

- 15) 私の住んでいる上の階 (に、ヤクザが住んでいる。)
- 16) 私がタイに到着した翌日 (、大学の総長室を訪問した。)
- 17) 角を曲がった最初の家 (に、政治家が住んでいる。)
- 18) 毎日新出単語を20個覚えた結果 (、英語の試験に合格した。)
- 19) この仕事に応募した大半 (は、学生であった。)

15) の例文は以下のような意味を含意しているわけではない。

20) 私は上の階に住んでいる。

15)～19) の文はそれぞれ次のような言い換えが可能である。

- 15') 私の住んでいるその上の階に、ヤクザが住んでいる。
- 16') 私がタイに到着したその翌日、大学の総長室を訪問した。
- 17') 角を曲がったその最初の家に政治家が住んでいる。
- 18') 毎日新出単語を20個覚えたその結果、英語の試験に合格した。
- 19') この仕事に応募したその大半は、学生であった。

すなわちそれぞれの文は次のような意味を表すことになる。

- 15'') 私の住んでいる階の上の階
- 16'') 私がタイに到着した日の翌日
- 17'') 角を曲がった所からたどって最初の家
- 18'') 毎日新出単語を20個覚えて獲得した結果
- 19'') この仕事に応募したうちの大半

言い換えると、これらの名詞修飾節は被修飾名詞の基準点、開始点を表し、被修飾名詞はそれらの情報を軸とした帰着点、相対的な位置・時間関係を表している。これらの「外の関係」を持つ名詞修飾節は「相対補充タイプ」と呼ばれている。相対的であるため、参照する情報を欠く次のような文は不自然となる。

- 15'') ?? 上の階に、ヤクザが住んでいる。
- 16'') ?? 翌日、大学の総長室を訪問した。

- 17”）＊ 最初の家に政治家が住んでいる。  
18”）＊ 結果、英語の試験に合格した。  
19”）?? 大半は、学生であった。

これらの文は先行文脈、もしくは名詞修飾でそれらの基準点を明示しないと意味が不明瞭となる。照応的な指示詞を加えて起点の情報を加えると、これらの文は安定する。

- 15”）その上の階に、ヤクザが住んでいる。  
16”）その翌日、大学の総長室を訪問した。  
17”）そこから最初の家に政治家が住んでいる。  
18”）その結果、英語の試験に合格した。  
19”）その大半は、学生であった。

「相対補充タイプ」の名詞修飾節は、このような指示表現を加えることで情報がより明確となる。次の節では「伝達内容補充タイプ」の名詞修飾節を見る。

## 4 伝達内容補充タイプの「外の関係」

「外の関係」には、名詞修飾節の底となる被修飾名詞句の伝達内容を表す「同格節」とも呼びうるタイプのものがある。

- 21) 彼女が離婚した噂が広まっている。  
22) 首相は消費税を上げる決断を伝えた。  
23) 大統領は兵士が数多く死んでいる事実を明らかにした。

これらはコミュニケーション活動と何らかの関わりを持っており、「～という」を挿入することが可能である。

- 21’) 彼女が離婚したという噂が広まっている。  
22’) 首相は消費税を上げるという決断を伝えた。  
23’) 大統領は兵士が数多く死んでいるという事実を明らかにした。

「～という」の代わりに「～といった」を使うと、「例示」の意味を帯びる。

- 21”) 彼女が離婚したといった噂が広まっている。  
22”) 首相は消費税を上げるといった決断を伝えた。  
23”) 大統領は兵士が数多く死んでいるといった事実を明らかにした。

伝達内容補充タイプの「外の関係」を持つ名詞修飾節は、伝達行為と関連する名詞句を底に取り、「～という」という語句の挿入を可能とする。これらの名詞修飾節に共通するのは底となる名詞句の「言語的な内容」を説明しているという点である。一方、そのような意味合いは以下のような例文にはない。

- 24) 農民が種を蒔いている絵
- 25) 子どもたちが苦しんでいる写真
- 26) ロケットが爆発する音

これらの名詞修飾節はスキーマによって理解できる関係を底の名詞句と結んでいる。

- 24') 農民が種を蒔いている姿を絵に描いた。→ 農民が種を蒔いている絵
- 25') 子どもたちが苦しんでいる姿を写真に撮った。→ 子どもたちが苦しんでいる写真
- 26') ロケットが爆発するとき音がした。→ ロケットが爆発する音

最後に、同じ名詞句を底に取っても、タイプの異なる名詞修飾の例を挙げる。

- 27) 日本語能力試験を受ける準備 (を毎日している。)
- 28) 一日に新出単語を20個暗記する準備 (をして、検定試験に臨もう。)

27) は以下のようなスキーマに基づく「外の関係」の名詞修飾節である。

- 27') 日本語能力試験を受ける：準備しなければ合格しない：毎日準備しよう。

この場合は「という」語句は挿入不可能である。では同じ「準備」という名詞を底に取る28) はどうであろうか。

- 28') 一日に新出単語を20個暗記する (という／といった) 準備  
(をして、英語の試験に臨もう。)

すなわち28) は「準備」という底の名詞の内容を説明する伝達内容補充タイプの名詞修飾節になっているのである。

このように日本語の「外の関係」に基づく名詞修飾節は多様な関係を底となる名詞と結んでいる。この柔軟性が日本語の名詞修飾節の特徴となっている。

## 5 主節との関係

ここまでの考察で、次のようなタイプの名詞修飾節を扱ってきた。

- 29) 煙が出ている煙突      煙突から煙が出ている。  
→ 内の関係
- 30) サンマを焼く匂い      サンマを焼いていて、その匂いがする。  
→ スキーマの関係
- 31) 私が住んでいる上の階      私が住んでいる階のその上の階  
→ 相対補充の関係
- 32) 彼女が離婚する噂      彼女が離婚するという噂  
→ 伝達内容補充の関係

これらの文は名詞修飾節を独立した文や節に言い換えることが出来た。では次のような文で同様の言い換えは可能であろうか。

- 33) あまり大きい車 (は運転しにくい。)      → \*車があまり大きい。
- 34) せっかく貰った指輪 (を彼女は捨てた。)      → \*せっかく指輪を貰った。
- 35) こんなに泣ける映画 (だと思わなかった。)      → \*その映画でこんなに泣ける。
- 36) 只でさえ英語の出来ない私 (は、外国旅行が不安だった。)      → ?? 只でさえ私は英語が出来ない。  
cf. 只でさえ私は英語が出来ないのだ。

これらの例文に現れている「あまり、せっかく、こんなに、只でさえ」といった副詞は従属節にしか生起しないという特徴を持っている。そして、それらが使われている33)~36)の名詞修飾節は、それに後続する主節の存在があって文法的な文となる。すなわち名詞修飾節を考察するにあたり、主節との結びつきも考慮に入れる必要があるということである。

その点について、「内の関係」の名詞修飾節が使用された次の文を見てみる。

- 37) 落合選手が入団した中日ドラゴンズ (は、打率がさらに上がった。)

日本語は固有名詞や人称代名詞も名詞修飾節の底になることで、他の言語(英語、中国語、スペイン語等)と異なっている。名詞修飾節も一種の従属節であるが、従属節に文の情報の焦点が置かれることさえある。

- 38) 誰が来たら、パーティーを始めますか?

名詞修飾節も同様に文の情報の焦点になり得る。

39) 何も知らない私だからこそ、大きな発見が出来たのです。

上記の37) の名詞修飾節も、主節の「原因・理由」を示すという機能を果たしている。従って、次のような言い換えも可能となる。

37) 中日ドラゴンズに落合選手が入団したため、打率がさらに上がった。

そしてその修飾部だけ取り出すことはできない。

37) ?? これは、落合選手が入団した中日ドラゴンズです。

名詞修飾節が主節と同等の関係になっている例として、対比の取り立て助詞「は」が現れるケースがある。

38) ビールは飲まない由利もワインなら飲む。

この文の「ビール (を飲まない)」は主節の「ワイン (を飲む)」と対比関係を結んでいる。従って、従属節でありながら主節と同等の情報価値を有している。そのため主節にしか生起しない取り立て助詞「は」が名詞修飾節に現れているのであろう。

さらに、名詞修飾節が主節に昇格したと見られる場合もある。

39) 彼が明日到着する予定 (を昨日聞かされた。)

→ 彼は明日到着する予定だ。

「予定」「計画」等の名詞であればこの変換は可能だが、「つもり」「はず」などの形式名詞化が進んだ名詞では不可能である。

40) \*彼が／の来年アメリカへ帰国するつもり → 彼は来年アメリカへ帰国するつもりだ。

41) \*彼女が／の午後到着するはず → 彼女は午後到着するはずだ。

このように日本語の名詞修飾節を考察するには、修飾する部分と底だけの関係を扱うのではなく、主節との関係も考慮に入れなければならないのである。

## 6 最後に

日本語の名詞修飾節は二つの大きな機能を持つ。

- ①被修飾名詞を特定する。
- ②被修飾名詞の情報内容を説明する。

また名詞修飾節が底の名詞句と結ぶ関係によって以下の下位区分ができる。

- (A) 内の関係の名詞修飾節
- (B) 外の関係の名詞修飾節
  - (1) スキーマによる関係
  - (2) 相対補充タイプの関係
  - (3) 伝達内容補充タイプの関係

しかし名詞修飾節は主節と組み合わさって初めてその機能を果たすのである。

単体の名詞修飾節では不自然だが、それより大きい文脈に組み込まれると自然になる例も見ておく。

- 42) この市議は美人すぎる。→ ?? 美人すぎる市議  
→ 美人すぎる市議は政治に向かないのではないか？

この文の「美人すぎる市議」というのはある地方議会の女性議員を指すのに使われたことがあるが、一般的な使い方ではない。しかしそれが名詞修飾節の中に生起し、主節と「原因-帰結」関係を結ぶと自然な発話になる。

- 42') この女性市議は美人すぎるので、政治に向かないのではないか？

本研究ノート of 考察の中で「基準となる名詞句」は名詞修飾節の底になりにくいことを見た。

- 43) トムはこのチームで一番背が高い。→ ?? トムが一番背が高いチーム

この文の「チーム」は、どの範囲で最上級になるかという基準を表す。この「基準」を表す名詞は名詞修飾節の底にはなりにくい。

ところが以下のような付加的な情報を与えた場合はどうであろうか。

- 44) トムは170 cmしかない。そのトムでさえこのチームで一番背が高いのだ。  
トムでさえ一番背が高いこのチームで、バスケットトーナメントを勝ち  
抜くことはかなり困難だ。→ トムでも一番背が高いこのチーム

この最後の名詞修飾節は、「この」という「特定」する修飾部と「トムでも一番背が高い」という情報内容を加えて説明している修飾部の二重の構造となっている。この場合、「チーム」は単なる「最上級認定の基準」を表しているとは言えない。すなわち「チーム」が単なる「範囲・基準」を表すのではなく、「情報補充」を受け「どのようなチーム」なのかを表現している。このような解釈を受けた際には自然な発話に近づくのであろう。

名詞修飾節を単独で考察するのではなく、主節とどのような関係を結んでいるのかを考察することが今後の課題である。

## 参考文献

- 阿辺川武、奥村学 (2005) 「日本語連体修飾節と被修飾名詞間の関係の解析」、『自然言語処理』Vol.12 No.1 Jan.2005 pp107-123
- 片桐史恵・田路敏彦 (2018) 「名詞修飾節の日英対照研究」、『中部学院大学・中部学院大学短期大学部 教育実践研究』第3巻、第2号 pp97-103
- 神澤克徳 (2012) 「外の関係を中心とした日本語連体修飾の分析—対照言語学的観点から—」『言語処理学会 第18回年次大会 発表論文集』(2012年3月) pp46-49
- Yabuki-Soh, Noriko (2013) Types of Japanese Noun-Modifying Clauses Used in JFL Textbooks, *Japanese Language and Literature*, Vol. 47, No. 1 (April 2013), pp. 59-92  
<https://www.jstor.org/stable/24394361?seq=1>
- 山下好孝 (2023) 「日本語の「内の関係」を持つ名詞修飾節について」『国際広報メディア・観光ジャーナル』No 36, pp99-113